南湖十七勝十六景漢詩文読解

監修　國學院大學教授　波戸岡　旭
明治大学教授　池澤一郎

白河城外南湖詩　二十韻

林　衡（幕府儒者　林　述斎）

河三亥（市河米庵）書

城南纔里余　城南　纔かに里余
茲有数頃地　茲に数頃の地有り
岡阜三面環　岡阜　三面に環り
中成衆水萃　中は衆水の萃を成す
沮洳長不乾　沮洳　長へに乾かず
荒無人所棄　荒無して　人に棄てらる
源侯鎮此城　源侯　此の城を鎮め
毎過駐車騎　過ぎる毎に車騎を駐む
心匠有所運　心匠　運らす所有り
何仮衆口議　何ぞ衆口の議を仮りんや
築防塞一方　築防して　一方を塞ぐは
功夫最不易　功夫　最も易からず
久矣民信之　久しいかな　民之を信じ
不令而麕至　令せずして　麕至す

冐雨況趁晴　雨を冐(おか)し　況んや晴れを趁(お)ふをや
一日千万簣　一日　千万簣(き)
経営未積年　経営　未だ年を積まず
終得功能遂　終に功能く遂ぐるを得たり
瀦成一大湖　瀦(みずたまり)は一大湖と成り
渟蓄汪汪翠　渟蓄　汪汪たる翠(みどり)
雲影与天光　雲影と天光と
映帯発妙致　映帯して妙致(みょうち)を発す
一朝旧観改　一朝旧観改(いっちょうきゅうかん)まり
無人不驚異　人として驚異せざるはなし
其山花可栽　其の山は　花栽(う)う可く
其水船堪刺　其の水は　船刺するに堪ゆ
風月撩勝情　風月　勝情を撩(みだ)し
来此誰不酔　此(ここ)に來たりて　誰か酔わざらん
小隊時出遊　小隊　時に出遊して
暫忘軒冕寄　暫く軒冕(けんべん)を寄するを忘る
偕楽及士民　偕楽(かいらく)　士民に及び
闔封受余賜　闔封(かいほう)　余賜を受く
冬則弋雁鳧　冬は則ち雁鳧(がんふ)を弋(よく)し
夏則採菱芰　夏は則ち菱芰(りょうき)を採る
豈料耕織外　豈(あ)に料(はか)らんや　耕織の外(ほか)

或収此贏利　或いは此の贏利(えいり)を収めんことを
大哉侯厥勲　大なるかな　侯の厥(そ)の勲
化工乃無類　化工　乃(すなわ)ち類無く
世々子暨孫　世々(せいせい)　子より孫に暨(およ)ぶまで
永仰当初治　永(とこし)へに当初の治を仰がん

《口語訳》

白河城からわずか一里余りの所に、数頃の広さの平地があった。
丘陵が三面をとり囲み、幾筋もの小川が集まり流れこんでいた。
それゆえ沼地となり、いつもじめじめしているので、荒れ地として人々に見捨てられていたのであった。
定信侯は、この白河藩主となられてより、この沼に通りかかるたびに、乗り物をお止めになった。
ご心中、しきりにお考えをめぐらしておられたが、家臣たちの提案を借りることはなさらなかった。
堤防を築いて一方を塞がねばならないのだが、その工夫がもっとも難しいことなのであった。
領民たちは、定信侯がいつか何かをして下さると信じていたので、命令が下されたわけでもないのに、大勢の民が工事の手助けに集まって来た。
雨をもいとわず、晴れの日は喜びいさんで、土を盛るかごが、日に千万回も数えきれないほど運ばれた。
工事ははかどって、一年足らず、ついに竣工の日を迎えた。
沼地は、大きな湖となり、水は深くひろびろとして、みどりに光った。
湖面には、雲の影や日の光が映り、このうえない美しさである。
一朝にして昔日の景観が変わったので、みんな驚嘆したことであった。
周りの山々には花を植え、湖水に船を浮かべるのにうってつけである。
どこを見ても心高鳴り、この風雅な世界に酔いしれぬ者はいないであろう。
藩主も時にはわずかのお供を連れておでましになり、ここでは身分の高下を忘れて憩われる。
藩士のみならず領民とも楽しみ、領民たちは思いがけない恩恵を賜わったことであった。
冬には雁や鴨を捕り、夏には菱や蓮の実を摘んで歩く。

なんと農事や機織りの仕事以外のことで、このような儲けが得られようとは思いもしなかったことである。
偉大なものは定信侯の功績。このような立派な教化と工事は、まったく他に類がないであろう。
この後、代々子々孫々にいたるまで、とわにこの定信侯の治績を敬い仰ぐことであろう。

共楽亭（きょうらくてい）　藤　孝肇（幕府儒者　尾藤二州）

傍山而臨水　山に傍（そ）うて　水に臨（のぞ）み
迎月又來風　月を迎へて　又　風を來たる
清楽何竟若　清楽（せいらく）　竟（つい）に　何若（いかん）
只與此人同　只だ　此人（しじん）に同（とも）にせん

《口語訳》
共楽亭は、山に沿うて湖に臨むところに有り、月の光を迎え、湖面を渡る風を受ける。
この清らかな楽しさは、いったいどうであろうか。
まったくこの亭の主人定信侯とわかち合うのがよかろう。
＊此人＝高徳の人、ここは松平定信侯を指す。

明鏡山（めいきょうざん）（鏡の山）　源　之熙（秋田藩儒者　村瀬栲亭）

使君隄作南湖出　使君隄作（しくんていな）つて　南湖出（い）で
共楽亭開壓酔翁　共楽亭開いて　酔翁（すいおう）を圧す
淡粧濃抹烟波色　淡粧濃抹（たんしょうのうまつ）　烟波（えんぱ）の色
応映天辺明鏡中　応（まさ）に天辺明鏡（めいきょう）の中（うち）に映（えい）ずべし

《口語訳》
使君隄が作られて、南湖ができた。
南湖の共楽亭は、かの有名な宋の欧陽脩の酔翁亭をも圧倒するほどのすばら

しさである。
靄がかってさざ波だつ湖上の表情には、（まるで中国の西湖に等しく、晴雨それぞれに）美人の薄化粧・厚化粧のようなすてきな風情がある。
まさに天空に架かる鏡のような月面の中にくっきりと映しだされているにちがいない。
＊淡粧濃抹＝蘇軾「飲湖上初晴後雨　二首　其の二」
＊使君堤　＝千世の堤の漢名

万花岸（真萩か浦）　樺島公礼（久留米藩儒者　樺島石梁）

植得胡枝一万株　植え得たり　胡枝　一万株
花交紅白映晴湖　花は紅白を交え　晴湖に映ず
湖風払處秋光乱　湖風　払ふ處　秋光乱れ
恍見雲霞満地敷　恍として見る　雲霞　地に満ちて敷くを

《口語訳》
この湖岸に異国の花樹を数えきれないほど植えたので、
今では花が紅白入り混じって盛んに咲きほこり、澄んだ湖面に映っている。
湖の上を風が吹き渡るとき、花々はさかんに揺れて、ぼーと見ていると雲か霞を岸辺に敷き満ちたようにうっとりするばかりである。

濯錦岡（錦の岡）　沢　良臣（白河藩儒者　松平竹所）

湖辺問霜信　湖辺にて　霜信を問へば
早已到岡楓　早や已に岡楓に到ると
濯錦真不誣　濯錦　真に誣ならず
波間一様紅　波間　一様に紅なり

《口語訳》
湖のほとりで、霜は降りたかと尋ねたら、もうとっくに岡の上の楓にまで降りているという。

紅葉を濯錦（錦を洗い上げる）というのは、ほんとうに偽りではなかった。
波のまにまは一様にくれない色である。

鳴秋原（松虫の原）　亀井　魯（福岡藩儒者　亀井南冥）

鳴秋原上草　鳴秋　原上の草
蒼莽簇金鈴　蒼莽　金鈴を簇む
積水無辺白　積水　無辺に白く
黄昏未了青　黄昏　未だ了くは青からず
宮商工節奏　宮商　節奏に工みにして
遠迩或聴熒　遠迩　或は聴熒せん
借問昌黎氏　借問す　昌黎氏
曽経抵此亭　曽経て　此の亭に抵りしかと

《口語訳》
虫が鳴く、秋の草原。
茫々たる青草の中で、虫たちは金鈴のような美しい音色で鳴きすだく。
満々たる湖水は、どこまでも白々とつづき、たそがれ時になっても、真っ暗闇にはならないのである。
高く澄みきった虫たちの音色は調べもたくみで、遠く近くさまざまに聞え、どこで鳴いているのかさえ分からない。
ちょっとお尋ねいたします、（春は鳥の声、夏は雷の音、秋は虫の音、冬は風音と唱えた）かの有名な韓愈先生。
あなたは、かつてこの素敵な鳴秋原においでになったことがございますか（是非、一度ご来遊していただきたかったものですね）。

＊宮商＝音階。高く澄んだ音。

＊遠迩＝遠く近く
＊昌黎氏＝唐の文人、韓愈、字は退之。

玉花泉（ぎょっかせん）（常盤清水）　篠　應道（大坂の儒者　篠崎三島）

涌泉山下迸　涌泉（ゆうせん）　山下に　迸（ほとばし）り
数歩入湖斜　数歩にして　湖に入ること斜めなり
明鏡高相照　明鏡（めいきょう）　高く相照らせば
水光作玉花　水光　玉花と作（な）らん

《口語訳》
湧き水が山の麓からほとばしり、四、五歩ほど斜めに流れて湖に注いでいる。
鏡のような明月が高みから照らすとき、このわき水の流れは月光を浴びて、
まさに玉花という月の花になる。

松濤里（しょうとうり）（松風の里）　頼　惟柔（広島藩儒者　頼　杏坪）

青松数里抱湖斜　青松（せいしょう）　数里　湖を抱いて斜めなり
常帯湖風日夜譁　常に湖風を帯びて　日夜　譁（かまびす）し
村翁不妨枕頭夢　村翁　妨げず　枕頭（ちんとう）の夢
穏臥波濤聲裡家　穏臥（おんが）す　波濤（はとう）　声裡（せいり）の家

《口語訳》
青々とした松原は、数里にわたって湖を抱くようにして斜めに樹ち並び、
いつも湖風をうけて昼も夜もさわさわと音をたてている。
とはいえその音は、村の翁の眠りの夢をやぶるというほどではなく、
どの家も、波音のような松風を聞きながら、おだやかに眠りにつく。

＊ 譁し＝かまびすしい。さわがしい意。

＊ 波濤＝松風の音

問月嶺（月待山）　井上政矩（白河藩儒者　井上残夢）

待月問樵童　月を待ちて　樵童に問へば
狂癡不解事　狂癡　事を解さず
謾言東嶺頭　謾言す　東嶺の　頭
夜夜玉盤至　夜々　玉盤至ると

《口語訳》
月の出を待ちながら、きこりの童にあれこれ尋ねると、
訳のわからぬ様子で、こちらの言うことが飲み込めぬらしい。
その童のとりとめもない話ぶりによれば、東の峯の頂きから、
夜ごと夜ごと、宝玉の盤のようなすごい月が現れる、とのことであった。

逗月浦（月見浦）　菅晉帥（福山藩儒者　菅　茶山）

秋郊省歛晩帰初　秋郊　省歛して　晩に帰るの初め
月底湖山好駐車　月底の湖山　車を駐むるに好し
最是清輝逗前浦　最も是れ　清輝　前浦に逗まり
冶波來映左金魚　冶波　來たり映ず　左金魚

《口語訳》
秋の郊外を巡察して、暮れ方に帰城しはじめたとき、月光に映し出された山と湖は、まさに乗り物を停めて賞玩するのにふさわしい。
ちょうどいま、月光の清輝が美しく湖の浦辺に映っていて、そのうち寄す波にとろけたような月光が、定信侯に照り映えている。

＊省歛＝領内の収穫を巡視すること。

＊左金魚＝太守のもつ割符、左符のこと。ここは藩主定信侯を指す。

蒹葭洲（下根の島）　辛憲（熊本藩儒者　辛島鹽井）

十里蒹葭露作霜　　十里の蒹葭　露霜と作り
月舎烟渚夜蒼蒼　　月は烟渚に舎りて　夜蒼蒼たり
遙看玉女臨仙嶋　　遙かに看る　玉女の仙嶋に臨むを
欲往従之水一方　　之に従いて　水の一方に往かんと欲す

《口語訳》

十里のかなたまで続く芦原の、その芦にやどる露が霜となり、
月は靄だつ渚につつまれて、夜は光を失って薄暗い。
はるかむこうに、美しい仙女が湖中の神仙島に降り立とうとしているので、
その後について、湖の向こう岸に行きたいと思う。

＊結句は、『詩経』秦風「蒹葭」の詩語。

玉女島（御影の島）　河世　寧（富山藩儒者　市河寛斎）

湖心小嶼平於掌　　湖心の小嶼　掌よりも平らかなり
楚楚孤松水一湾　　楚楚たる孤松　水一湾
不礙瀟湘千頃望　　礙げず　瀟湘　千頃の望
免教李白剗君山　　李白をして君山を剗せしむるを免る

《口語訳》

湖の中心の小島は、手のひらよりも平らかであり、その島の湾曲したあたりに、くっきりと一本の松が立っている。
このように玉女島は小さな島だから、瀟湘のごとくすばらしいこの南湖の、ひろびろとした眺望を妨げることはない。
それゆえ、洞庭湖の君山を削ろうと詠んだ、かの李白に削ってもらうまでも

あるまい。

＊剗＝けずる

使君堤（千世の堤）　古賀　樸（幕府儒者　古賀精里）

列松堤上翠　列松　堤上の　翠

湖色更分明　湖色　更に分明なり

千載興民利　千載　民利を興す

風流刺史名　風流　刺史の名あり

《口語訳》

南湖の堤には、松並木が青々と連なり、湖水の色はさらにくっきりとしたあおみどりに澄んでいる。

この堤防は、長しえに領民のために役立つために造られたもの。

まさに定信侯こそ、「風流刺史（風雅な藩主の意）」の名にふさわしいお方である。

＊「使君」も「刺史」も藩主の中国式呼称。

鹿鳴峰（小鹿山）　立原　万（水戸藩儒者　立原翠軒）

湖南草色一峰匀　湖南の草色　一峰匀しく

閑客往来山鹿馴　閑客往来して　山鹿馴る

侯駕時時遊豫處　侯駕　時々　遊予の処

呦呦声似待嘉賓　呦呦たる声は嘉賓を待つに似たり

《口語訳》

湖の南岸にあおあおと茂る草原は、峰をすっぽり覆っていて、

風流な人が行き交いするので、鹿もすっかり人馴れしている。

藩主もまた折々に駕籠でいらして、おくつろぎになるので、

和らぎ鳴く鹿の声は、まるで（『詩経』の「鹿鳴」の歌のとおり）貴賓の

お客をお迎えしたかのように鳴り響く。
侯駕＝藩主の乗り物。

曉月渚（有明崎）　大塚　桂（白河藩儒者　大塚毅斎）

秋浄湖天曉　秋は浄し　湖天の曉
沙洲月色残　沙洲　月色残ず
一行斜度雁　一行　斜めに度る雁
影落碧波寒　影落ちて　碧波寒し

《口語訳》
秋の空気は、あかつきの湖上の空に清らかに澄みきって、湖辺の砂地には、まだ月の光が照らし、消えようとしている。一列に並んで飛びゆく雁の群れ、その影が湖水に落ちて、寒々しく感じられる。

五徳村（八聲村）　広瀬　典（白河藩儒者　広瀬蒙斎）

鶏叫林霧氣消　鶏　林墟に叫いて　霧氣消え
東方初旭赤如焼　東方の初旭　赤きこと焼ゆるが如し
青山界断晴湖外　青山　界断す　晴湖の外
穿破松間路一条　穿破す　松間　路一条

《口語訳》
村里の鶏が時を告げて、朝もやが消え、東の空に上りはじめた朝日は、火の燃えあがるごとくに赤い。
青々とした山々は、清く澄んだ湖の向うにくっきりと聳えたち、松原のなかを、まっすぐにひとすじの路が貫いている。

一字松（千代の松原）　井潛（岡山藩儒者　井上四明）

欝如一字自成文　欝として一字の如く　自から文を成す
落落高標欲入雲　落々として高く標して　雲に入らんと欲す
晩翠千秋長不変　晩翠　千秋　長へに変ぜず
願将此操奉邦君　願はくは此の操を将つて邦君に奉ぜんことを

《口語訳》
こんもりと茂る松の樹々は、みな一という文字のごとく、まっすぐに聳えておのずから風格がある。
たくさんの松樹が高きをめざして、雲の上まで伸びゆこうとしている。
冬にも枯れぬ松の緑は、とこしえに変わることはないが、我らも、この松のような堅固な節操をもって、藩主にご奉公してゆきたいと思う。

建碑の由来

儒臣　広瀬（広瀬蒙斎）典識
陸奥国　飯坂　杜文剛　謹鐫

湖を創り、勝を命ぜしは我が老公なり。詩にして歌ふものは顕官聞人（高官の有名人）にして、皆親跡なり。

《口語訳》
南湖を造営され、勝（１７景）を命じたのはわが定信侯である。詩文を詠むものは才にも優れた身分高く著名な方々の作で、みなご自筆のものである。
文政庚秋（一八二〇）八月は、則ち碑を刻せし歳月也。